

第 13 回

掛川考古展

——縄文時代のムラ——



とき

平成6年10月30日(日)～11月3日(木)

ところ

掛川市生涯学習センター・ギャラリー2階

掛川市教育委員会

開催にあたって

掛川市では、明和9年(1772年)5月21日(陰暦)、長谷から銅鐸が出土し掛川藩に届出されたことにちなんで、昭和56年にこの日を掛川市「考古の日」と定めました。これを記念して翌年から、広く市民の方々に文化財について理解を深めていただくため「掛川考古展」を開催し、今年で13回を迎えます。今年は縄文時代のムラをテーマにして皆様にご覧いただきます。

我が国の縄文時代は今から1万2千年ほど前から、およそ1万年のあいだ続きました。氷河期が終り、気候の温暖化とともに広がった広葉樹林に囲まれ、豊かな自然の恵みを受けて、人々は竪穴住居に住み、ムラをつくって定住を始めました。縄文土器に代表される縄文文化は、世界に例を見ないほど豊かな内容を持っているといわれています。特に近年、全国各地で開発が進められるなかで、縄文時代の新たな遺跡が発掘調査され、その生活・文化の内容が次々と新しく書き加えられています。

さて、今年4月、140年ぶりに木造復元された掛川城天守閣を訪れた、市内外の多くの方々は、掛川の中世・近世の人々の営みに思いを馳せたことかと思いますが、その人々の暮らしを遡っていくと、この掛川の地は豊かな自然に育まれて、ずっと以前から人々が住みつき、豊かに暮らしていたことがわかります。特に、原野谷川、倉真川、逆川沿いの台地の上に縄文時代の遺跡のまとまった分布が見られます。現在までに、原里の上ノ段遺跡、萩ノ段遺跡、吉岡の中原遺跡、大池の源ヶ谷遺跡、西谷田の原遺跡、八坂の向畑遺跡などが発掘調査されています。発掘によって得られた資料は、当時の人々の生活を雄弁に語ってくれる貴重な文化遺産です。

このたびは、それら発掘によって出土した遺物を展覧し、縄文時代のムラにおける人々の暮らしの一端をご覧いただきながら、実物大模型の竪穴住居にみなさんをご招待いたします。この機会に、多くの方々に縄文時代のムラの有様に触れていただき、我がまち掛川の歴史をふりかえるとともに、文化財の重要性を考えていただくきっかけとしていただければ幸いに存じます。

平成6年10月

掛川市教育委員会

教育長 大 西 珠 枝

縄文時代

今から約12,000年前、日本に土器が出現してから、水田稲作の始まる約2,000年前までのおよそ1万年の間を縄文時代といいます。縄文時代は、長かった氷河期が終わり、温暖な気候のもとで、狩猟・採集を中心として定住生活をおくった時代と考えられています。縄文時代の人々の生活を知るには、発掘調査の成果だけでなく、狩猟・採集で暮らしている人々の生活（民俗事例）が参考になります。

ムラのようす

気候が
温暖にな
ると、木の実など食物をもたらす豊かな森がひろがり、人々はけものを追って移動する必要がなくなりました。そして、一定の場所に住むようになり、2～3軒あるいは5～6軒ほどの家の集まる「ムラ」ができあがりました。

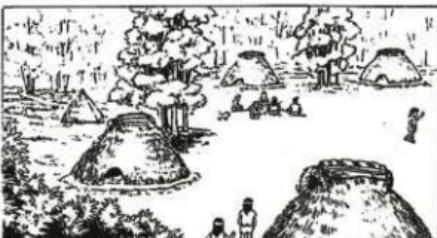
環状に並んだ家々に囲まれた内側には墓地がつくられることが多く、さらにその内側に広場が設けられていたようです。出土遺物からその広場ではさまざまな儀式（おまつりごと）がおこなわれたと考えられています。また、民俗事例から家の付近で土器づくりがおこなわれたり、斧や弓矢をつくるなどの工作がおこなわれたと思われます。

以下、ムラの中のようすをのぞいてみましょう。



縄文人の一年

(縄文カレンダー・小林達雄 原案)



ムラのようす

採集・栽培

縄文時代の 主な食料とし

て、ドングリ、トチ、クルミなどの木の実、ソバ、豆、アワ、ヒエなどの穀類、サトイモ、ヤマイモなどの根菜類があげられます。はじめ人々は、自然に生えたものを採集するだけでしたが、それらを栽培することを覚え、集落近くの傾斜地を利用して畑作を始めるようになりました。山火事のあとには植物の生育が良いことから、山林を燃やして烟にしたり、収穫の終わった烟を焼いてその灰を肥料にすることも知りました。この「焼烟農業」によって狩りや漁労に加えて、計画的に植物を食料として確保できるようになり、生活が安定して人口も急速に増えていきました。

まつり

縄文時代の人々は、豊かな自然に囲まれて生活していましたが、恩恵にあずかる一方で、そのきびしさも知っていました。年によっては食物が手にはいりにくいことがあったでしょう。そんなとき、人々は広場でまつりをおこない、豊かなめぐみを願って祈りをささげていたことが想像されます。まつりに使



採 集



石皿と磨石を使って木の実をつぶす

わられたものとして、石棒・石剣・土偶があります。石棒は、端または両端にふくらみをつくっている石の棒で、男性の性器をかたどったものと考えられます。土偶は、土で作られた人形で、女性を表現したものが多く発見されます。また土偶は、完全な形で出土することは少なく、多くは手、足などのからだの一部だけが発見されます。

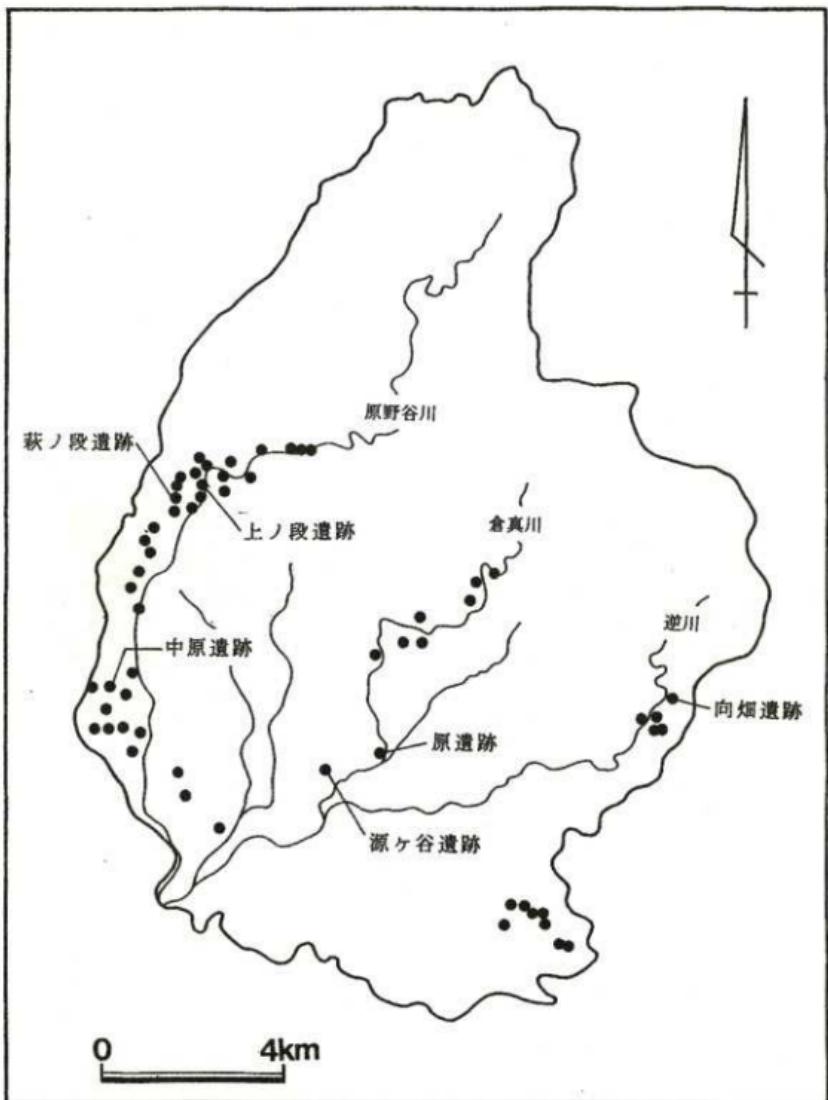
墓 縄文時代の墓は、多くの場合地面をだ円形に掘りくぼめた穴に、遺体をおさめるものでした。ひざをかかえるような姿で葬られる屈葬、また手足をのばした姿の伸展葬があります。墓はムラの中ほどに家々に囲まれており、生きている人と死んだ人が、共存するかのように配置されています。

これは次の時代、弥生時代以降に墓はムラと違う場所につくられることと対照的なことです。



まつりのようす

挿図引用文献 「少年少女 人物日本の歴史」第1巻 1984 小学館
「日本の歴史1 日本のあけぼの」 1982 集英社



縄文時代の遺跡分布図

市内の縄文時代遺跡

縄文時代の人々が「住む場所」として選んだ土地は、水に浸かることのない高台で、ムラを作るだけの広くて平らな地形でした。また、食料とする動物が多く棲む森や川が近くにあり、実の成る木が繁茂する森林も間近に控えるような土地が求められました。

これまでに掛川市内で発見されている縄文時代の遺跡はおよそ60ヶ所を数えますが、遺跡分布地図でわかるように原野谷川、倉真川、逆川沿いに遺跡は多く発見されております。これらの土地は、前面に川を臨む高台で、山林を背にした所であることがわかります。

次に、市内で発掘調査された縄文時代の遺跡を紹介していきましょう。

上ノ段遺跡　掛川市の西北、原里字高山の原田小学校を中心とする台地上に広がる、縄文時代中期～後期、晚期(5000～2000年前の間)を通じて営まれた、大きな集落跡です。

遺跡から出土した土器や石器の数は非常に多く、形のわかる土器も発見されています。これまでに行われた調査では、住居跡などの建物跡は発見されていませんが、採取された石器の中に石棒・石剣などの「まつりごと」に使われた道具が含まれており、当時上ノ段遺跡が、周辺のムラの中では中心的なムラであったことがわかりました。



上ノ段遺跡出土土器



軒ノ段遺跡の住居跡

萩ノ段遺跡

上ノ段遺跡の南西

400mほど離れた台地

上にある集落跡です。遺跡は原里字萩にあり、現在茶畠と栗林に覆われています。

遺跡は、上ノ段遺跡よりも古い縄文時代早期後半(およそ8000年前)にムラとして栄えました。その後ムラは一旦途絶え、中期中葉(5000年前)になって再び作られました。



中原遺跡の住居跡

調査では、多数の住居跡が発見され生活に使われた土器や石器が出土しました。

中原遺跡

萩ノ段遺跡の眼下を

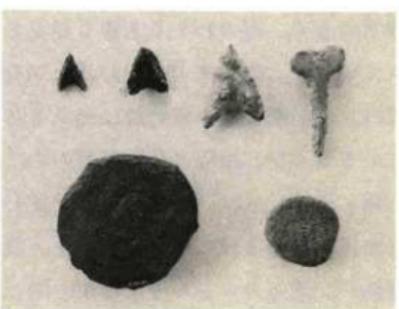
南に向かって流れる原野谷川を、5kmほど下った西側の台地

(吉岡原)の上にあります。現在、遺跡のはほとんどは茶畠や研究農園となっています。遺跡はおよそ5000~4000年前の縄文時代中期を中心に営まれた集落跡(ムラ)として知られています。



中原遺跡出土土器

これまでの調査では、当時の住居跡・柱穴列・土坑が発見されており、吉岡原で中心となるムラであったことがわかつてきました。



中原遺跡出土石器等

出土したものは、土器(深鉢・浅鉢・土製円盤)や石器(石鎌・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・石錘など)があります。

源ヶ谷遺跡

市街地に近い大池の北側台地上に造られた団地造成工事によって発見されました。

調査によって8000年程前の縄文時代早期と4000年程前の中期にムラであったことがわかりました。

調査では、住居跡や柱穴などの穴が発見され、市内で最も古い土器の破片(8000年以上前)や石鏃などの石器が出土しました。

原遺跡

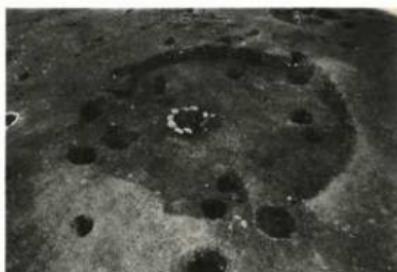
南に市街地を一望する台地上に遺跡はあります。

住居跡は発見されていませんが、隣接する谷間から4000年程前の縄文時代中期後半の土器(深鉢・浅鉢)破片や石器(石鏃・打製石斧・石匙・磨製石斧・磨石など)が、非常に多く出土しました。

向畠遺跡

坂バイパス建設に先立つ発掘調査によって発見されました。

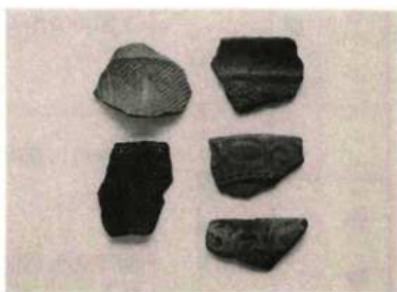
市の東部、八坂地先の山稜上平坦地につくられた集落跡(ムラ)で、4000年程前の縄文時代中期を中心に営まれました。調査では、住居跡・焼土坑・集石・小穴などが発見され、多数の土器(深鉢・浅鉢)や石器(石鏃・打製石斧)が出土しました。



源ヶ谷遺跡の住居跡



原遺跡全景



原遺跡出土土器

年 表

時代	年代	全国のできごと・生活のようす
先土器	前 16000	港川人(沖縄県)が出現する。
時代	前 10000	三ヶ日人・浜北人(静岡県)が出現する。 縄文土器がつくられるはじめる。
縄文	前 7000	気候の温暖化により海面が上昇、日本が大陸とはなれ、日本列島の誕生。 弓矢と犬を使う狩りがはじまる。 魚を道具を使ってとりはじめる。 貝塚の形成はじまる。
時代	前 4500	堅穴住居に住む。炉は屋外にある。
中	前 3000	気候の温暖化がピーク、海面がさらに上昇。平野の奥まで海が入りこむ。 現在とほぼ同じ植物が、日本列島をおおう。 炉をもつ堅穴住居が広場をかこんでムラをつくる。
後	前 2000	立体的な文様をもつ土器がさかんにつくられる。
晩	前 1000	気候の寒冷化すすむ。 関東・東北地方を中心大きな貝塚ができる。
弥生	前 300 250 紀元 0	土偶がさかんにつくられる。抜歯の風習が全国にひろがる。 大陸から稻作が伝わる。 稻作文化(弥生文化)ひろがる。



文化財愛護シンボルマーク